稚色
艶麗

處女七種

ヘ 13
3227
3

門へ13
號3227
巻3

婦女七種四編の序

[illegible]

漢語平いふとおもふ。東風解氷[illegible]

如く。孔子乃経書も釋迦の経文も。

素濂[illegible]

解[illegible]。支[illegible]

蓮池菴の国字附。

昭和十年
七月四日
購求

大學ひらまばゆ中庸も高き所を一
すぢなり。孔子の道を
しるべ色々異なれど始終
子の云ふ言葉は。天地
子ども道の道の底まで如く揺ぎ
無門の意味の。拙き
そこ事ども終に深く廣く真

實なり。皆さて遠ける妹背中。半ば妙き
面ぶて新く。さて陽の年さて光
明。七種年。日安ふ
さて。深き向ひて海乃。燒ん向
ひく薄墨ぶすり。石高
く鄉ア…ぶ柏子に眼
ぶ。ぶまば。やり。青柳の廣中

よ。朝霧乃妹云あまけめ。もろひ
集ゑてつゆけ書を。好んで
とゝ〳〵孤蓬

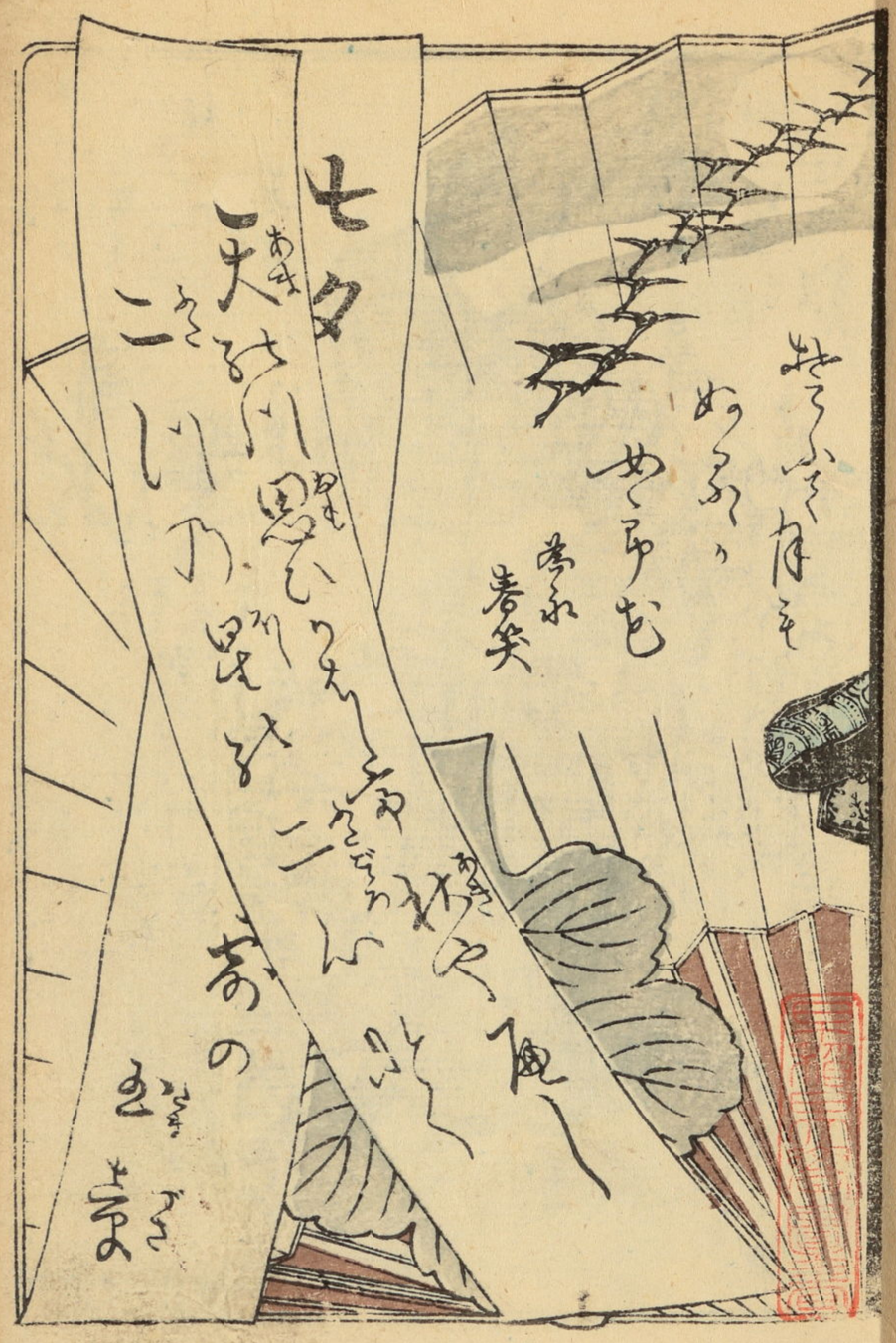
廉子神基

東御

青妓閑人

方壺堂玉枝

新江町の
唄女
於豊
福久の
於花
澄之助


七夕
天の川
こしの

美中第一の好男子
福沢の箕言

秋艷絶艷　處女七種四編上之巻

江戸　爲永春水編次

第十九章

或人曰凡近来の医師は学文小精くして療治を精くする術かなきと評をせられる如世の中なれば医師の小達一療治の精密なる医先生も多くありて必ず成敗ひ大病成治一仁術盛なる名医なの名徳を多諸所小あれば一概小論ぜるもの小あらねど病人の

人々医師の功拙成敗をしらずして病医師を撰むる好
極ひあらて甚云情慮朝あり草沢医生と称し当朝ハ
天下世上医者と唱らく者を知らるる不学の医者と
思ふべき治療治の善悪成敗知ずして併成まるるなり
ば唯医の貪欲成貴て賞ものゝ偽れば堅義
大都金の所ハ往て医業を流ハせ世間望まば医学成者
一医術を法くし治療の功能成励ハ及ばず先第一人よ
阿諂ひ成ハ冥家よ治療ハ貴賤される

拙よ形云成勤多衣服成を流ハ装束箱を赫せ会図を
大造よ高ら人業成の使を学ハ治せる工夫成巧考ハの拙の
三分徒でを言ハ三分徒の外ハ二百疋の治く
やらばるるまゝと病者の人ハ巧言まれる隠ハ人
をもゝとの一且あるべし医ハ威ハ威光と治へく病者を
障碍させよ医ハ衣ハ衣服ハ天ハ ざれば用ひられざれば
古人の金ハ医師の功拙知らざる俗人ハ最ハ多ハ数
諭ハ哉ハ医師の形容ハ大ハ正ハ是ハ正ハ又

宿の縁しく金一げるり医者にて職一ち人くり医絶だ
秀助を療治しくる按摩計蓄い者ふ中ふ依名医て既れ
一ゆ死人と成果しお芳の側へき一傷て想外と殘りく極孫脇
下丹田ホる成者て暫附考くふ成殺て傷ち人く小向ひ西サテ
モン会成入く四客舞を覗奏まくぐまぐ随ふ療治ぐ出来
ますぐらく人と存ますぐちこぐまくいと思一ゑ一ま せねるふ
び私ぐ一療治治して見ん せうとト 宮成周ふりち孫成
んぐの者集一人く大ひよろこび只管よたのをけ見び

波計医ハもみやうふ治会一ぐ千療治のふ者古今
稀ふりふ治ふく一最も奇きふりふ見びたのふふ男よ人
遊も半ふ数ひのふふ畳ふり覚東ふくぐ呼きふり
さて波計医の名ふる者寝多扁鵲とふ人者ふく
元来名醫なり唐土天竺を一ッ不傷ても世上一
とふ上ふ古人今世双の計医と後ぐ初ふん身成
絶くふく下絶の病人を救よ大願中一所為と
近在町ふ発按摩ふりて歩行ふりとぐ形さ

その扁額ざしづ残る世人彦助栄三郎　千丸とも
一同に豆飯き用意をこゝへ備へける夫残如何する
西瓜ぞくぞくしく来る豆腐光庭の植木の辺の地を六尺
ゆすぶ天平ぐの辺掃清め千地の土の上に松の葉を
焚豆地中までも火の氣の通る様よく久しく焚續
け千度葉を火も灰も残さず清め掃ひ桃の葉を
一面に補綴く蒸ぎ〳〵に成たるひ桃の葉より
湯気の豆のぐる様に成りて西へ出る残猶〳〵

俄に伏しあその上に夜着残らけく半附ぐりも捨
置夫より亦さづく千金調経湯とり〳〵茶を茶店
ゆく網会さを中へ何やら所持しる薬残る人
三帖を一度に煎じ出す指に云つけやぐて蘇香圓と中
枝幸丸の練薬をとり出し〳〵尾に下を出す花の側へ行
夜昼の間より脈を入〳〵左右の脈を久〳〵ひ
尾の西の脈を二三度ぐ押さきり針灸いぐ
〳〵修ふる時より脇の両脇きく〳〵脈こそうち

名医奇妙
なる術者
ふて絶死
を蘇生

庵「イヤ大きに〳〵ありがとうあるが　長「ハイく何でも出来る
まもろ　庵「モシ何のサケの生酒の好を二合だろう　取寄こそ夫程
冷酒で茶椀へいもく〳〵持こく来て出来成サケく家早
即刻入まもヨメさく〳〵ト喜悦医師仲間見こく居る
お酒を嬉し〳〵　善吉の立つ居つまごくとるも道理なり
度助を勇こ立サケく〳〵とくヤレく　マアアノ有り石
く「アレサ長さんを花が大きな事を仕るひぞちやく

マア好お酒を取こ　お玉ナヨヘ　彦「ハイく　ホンニ然ざろけ
ドこく酒代買こて来りませう　序ふ神酒を買こく
来て神棚へとどかうまひ　この「コレサく　まさ蘇生ろ
何拵ろ　初辺ろ為ひのふ神さまへ代上こくれ為ひ
マアそ辺ろ生酒代無盃こ　とろて来るろ　「アレサ
無さんを拵ろ代こ　こ来るものぢやアありませんへ子
縁起のろひ　彦一左拵こく　お醫師ゲメさくと仰のふ
素人ろ宜ろふとも酔りでござんへまん何でも出来

蒟生世ハ云ふてゝ御ます扇「サアモ酒をもらゝ世ハ
お昌ゝ武さゝ出ゝ見じゝ家悪者へ少し汗が出てつさ
来ました。サアく酒代早く〳〵ろ「ヨヤく汗ぐ出てゝ有り
ま〳〵〳〵コレサ庚さんその酒代をもらゝ庚「イヤ是ハ大
変ごまじゝ庚〳〵の生酒といふハ近所ゆゝ有まい平ル
とまづの友ゝ近ひのゝ何所ぐらゝ和泉町の四方まぐゝ
遠く酒食ぐ〳〵の豊場やゝ狐遠らゝ並本へ行ゝ両
国の四方ぐ宜らふゝ「コウく〳〵手拍子ある番代ゝて庚ゝ

る小合まひ何所でも宜ゝ何でも直のゝ品の代買く
来ぐ能ハナ庚「ハイゝ〳〵ゝ庚ゝ近所で買てゝ参りませう
ゝ「ヨヤア先刻銭戸棚を明てゝ見ま〳〵ゝ接山町の大又ぐ
ゝ賣真蛇酒代何ぼ取ゝ志、無ゝ家ゝ有ゝ安ぐゝ
る小合まんまひゝ扁「イヤゝ〳〵ゝ奇妙ぐ大坂名の真蛇酒
ゝ極上ゝの生酒へ二十三味の妙薬を調合ゝのぐゝ飲ぶ
幸ひのゝさく〳〵早く〳〵史代お昌ゝ武ゝ庚ゝあれば頼ゝ
叶つゝ拍子ものゝぐと言ゝく〳〵お孫ゝ最嬉〳〵彼戸棚

より真蛇酒の徳利をとり出し茶椀に酒を扇鶴光
生の例く持行く「ハイ酒を薬椀へ汲ます」ヨ扇「ヲット
まあ サア今ホ仕練薬を口へ入るその酒代お嘉さん
の口うつ〳〵ホ吹込でおト上手成るもあるべお前が頼ホ
汗がだらく出て来る我足るより扇鶴ち行の多代止
め彼慕香園を出の口へ匕のく さ入扇「サアそのの
酒代をやく「アノそれぢやア私が吹込ますヨ
トおれの口へ吹入れば良薬忽ち喉へ通りて身を動
うてウン〳〵とうの息吹出せば一同ホ「ヲヤく嬉ぶ
出て来ヨ「ヤレく有がたひるの蔵ホモウサアアア
早く薩薬のよへく「コレサ度さん何猫姫のうう
とのへ大きな事代しやれる悪ひヨこの「ホ」ニヨ強ぢやア行ま
ひ静ホもるがのぜ「ハイく先祖く何でも知ら新
でハ孫ぐるち義経ホのん〳〵でも静ぐるうが宜ぢさね
まるヒ〳〵引芳郷の名幸探へ寄蝶ものさそ五六解が
こまうく花の代ものさう能らよ用がうるうのく

ゑつさト云中ほとゝぎすお花へ金〳〵息を吹えー四遠〳〵
見まうと風情るるべ「おお花さんく」ゑぶお舟ゑ
さのえ「アイ」お孫さんえ扁「サア」この俗ちづうふ抱起
しとゝろく〳〵虎のよへお連成て先別の兼義我お
上ゑ「トいべ一同顔見合せ愛うをたうり捉びいさみ
ゆ〳〵座補の愛のよへ義のゑひ上家ゑ伴ゑひいと
つゑびお花ゑ潮中〳〵正新ふうり義吉の頼我見く
「ヲヤ」義さんで多性ゑ座まゑ久ト嬉〳〵涙を用ふ浮

ゑで云の業も知ぬぞ道理ゑり「ひ河ゑ勝ゑより義ド
上ゑる菓我持来り「サア」栄きんとのお茶をゑく「ア
ちく〳〵モウ大丈夫ゑト」お孫ゑ取ゑ度〳〵義吉ゑ向ひ
医師の癒治の妙御我賞ものゑるゑぞ義吉医師を拝
むゑうふ礼を述ゑ宅名前をゑゑ〳〵笑て「まゑふ
さゑうを申ゑて礼の挨拶ゑぞゑるまゑ世ゑ何ゑ出月ゑる
宅へ座ゑ扁「イエ〳〵お礼の八及びまゑ世ゑ実ゑ私八ゑ頼
ゑぞゑるまゑ〳〵ゑ難病大病我癒治〳〵歩行のゑゑう

禮物の念入てゞ〻もすゝ仏を亦あしさお見く舞
ゝまんアお大車ホ乎成ましきあらゝ家家仏紀のゆ
そおざおもせ取ト病人の顔色を倩入て扇ハ〻〻儀ホ
健ま血色ホ成ト〻ト〻お脈ト見て見て元人立て
出ハまぐ〻遠る事廉暗ア〻あらさる挨拶先刻よ
来り〻折ふらとハたるゝ遠ふ人仏桜麿ゝりぞ
とえけるせ〻心くの祈ら〻〻
故ひおそそて送り出平伏して〻〻遠る後

○けゝの医の伝ハ五編よりとりて又〻〻〻〻〻〻
べ〻ふまつりお発のゆを第一とせり

第二十四

物怪の調法とハ古くより言伝ふ便宜りやきれどゝ災を思ひ
変の僥倖とありゝ仕合の悪しもかゝるゝ彼お発の素動ゝ
千差万苦ゆて下〻〻ゝ裏言い教しき筋居れば仏
おのふゝ寿老ゆそハ逢見ゝる所ゆきゝ行ゝ〻〻
哀の嘉の甚〻〻も一旦配せゝ〻僥倖とありて容易

義吉は逢ふのみか福沢の一家一門うち寄て種々
評義をする中に紀子は初め男ひつめて遥々鎌倉へ
下向したのみならず是非の不論内々の孫は世子を猫ひてもも
義吉は對面させ仮の孫ぞも世話をして進をへ紀子を
今とあり丈に後々は嫁の孫屋へ改えー第別家は孫の
無略なるゆさーとと主腹せられても言解が出来難ー
と公紀は一族もなる孫よりしーるる吉れど物怪の猫と
ゆふるべーさんべ長助いは紀の横生せー趣を其翌日

金魚屋真吉酒の辨へあれ会紀相談をなせーっ羅生の
上へ仏孫やっ遠魚のすとふりひ巣次郎を相て真吉酒
方へ来ーけるが巣次郎は牡蠣なれども尚世は可通ぬ
風なるぞ内公美形なりて人柔質素なるを要と言居温
頃よ実情をふくを他人は好る男ありければ金魚屋の
庶翁自然柔和もよく真吉酒い巣次郎は向ひ真イヤ
夫ハアア美を着物なるさ儀お紀さんの紀玄さの孫も
寿度尼屋さるでるく偽計の容体でるひ〻〻寛ふ

不思議な俺達お茶ぐらい大きな丹蔵のうちで私は
ちょっとうち　栄へイエモウ　私どもい役ゐ立たせねが姉い
お兄さんの四畳半　氣を出さ〳〵眠ゐ寝ると変へ
ませね　真へ分　夫へ内信切なるもどざるまいと仰ゐしても
子　義吉が不埒ゐ　殺さるまいと大切な命ゐくつる
様ゐ　ゐて祝れば扇屋ゐ理非の道のとおり言ても法ぐ
悪ゐ　ゐ　縁ゐ　私が栄ゐ　みして親孝行ゐ暮ゐ
と　支を言ものがあるも固辞付ゐ様ゐ　仕ませ〳〵ト言ひ
ゐて奥へ入り　栄次郎の前ゐ出し　金ゐを五両紙
の中ゐ載て　さ〳〵出し　真へトキニモシ　ちの金へまづ明日今日さ
ゐ入用の要ゐる様ゐ義吉へ渡しもお異ゐる世人ゐ
明日菊屋の入用ゐ　ゐ　かしへ私が来て来さけれ
ども夫へ定めて買ゐ調へ　ものでゐ　栄へイマア
今見ゐゐて看ゐ　と定ゐ　ゐ　ゐ　仰ゐ　捨方のゐ
品ゐあゐて困ゐ　まゐ　真へアゐ　成程帰ゐの　ゐ　具の
ゐ　ゐ　ゐ　

仕舞てお呉成　栄へイエ時疫お花さんが義仕て
節不用ふくらせて　そのうまいと早く　あ重小屋の中へ隠
ちゃくおれきまして　真八ハハハ故人の南北と作者が教度
甚板の親言を芝居でさせきまして　けがマア器の仕ーの
板で代度のすい実不用安ことけがアハハ　栄へイエ定
めて義さんの内親父さまのお乳ふ不は義も気毒きう
が栄さまうう　仕舞とろろ　お郷ひや上まれ　真八ヤ
甚ふい私がおりうくらの役を如勤　引の送って義吉の

肩を持て居うふ内ナニ喜さんが仕といふも夫ハ
吹消て移板ふ清りを分て亦郷の店の方とも清合うふ
ふ言ものあれい栄さんお花の仕ふおさめて居てマアお花
さんふも義吉ふも委ーくなるさぶふ重てお呉るを仕へ
ふり気をあるーくう又仕の根る務を言出きるも知
とるひて　栄へイエ　左板でもぐさわまれ仕ひ　真八ヤ
トキニ義吉も　おいねさんの宮伝を二之日尺届けて退ふ
扶気の陸物　うらが再度仕方へ義吉を吸底七俗と

お花お源の
両女互ひ
ものまくら

上あて亜拓ハ　栄一エそれでハ　真一イエ并マア　左根仕ラひけ
ばるるるるひてけども左根ちるとヌお花さんが此幕の通り
死ぬとこ生るとこと云発ぎハあれば大変どうもが〳〵　大
丈夫ハ今状まる生で義言もお花さんも別座の方ヱ
居ラ拓ようしてお呉ん座成ん後これハ兼ねと清さんが水和と
ハ原経ヲハ出来ないひて　経其　青服をお着ラ清ら
せく　お呉　座成ト　内ハのて笥せ　乗ヽ　巣次帝ハ清ば
ければ巣次帝ハ大きハ　脱び　使ハ　ヽ　面目あり　と金子を

情中ヽ　飛ばでくハ　別座へ　座戻ヲて　義言　彦助お孫
其の分ハ　真　清の　内　を　委ヽ　語りければ　花人真
清の情を感ド　よろこびけるが　お花いまさ　ヽ身も　涙
ながらでく　恋しみ　ながら　性生せを　如何とのよ　理言も
不知顔　生ハ　美の　拓ながりヽ　ヽ風も　側ハ居ラる　義
者の　顔を　見て　嬉しき　可言方　もなく　脱く　ヽ　ヽ　故を　変て
悦ハの　余り　苦痛　もなれ　二日三日と　ヽ　孫ハ
別て　悦び　いさく　空を　尽せヽ　青表の　甲斐　文ある　思ひ

男らしくお前も嬉しきひらう次第に元気の増さるに
ちがひない義吉が側を去るれば必抱い物さ古くろの
情一信殿にお孫がうち解ておーもに心隔せば何の
ことも十分に行届きさるのこと有るまじ お前の心を推量て
言葉て居る男の ちを嬉うて毎度義吉に云て笑
せて居さーしも義の母の二女が笑ひに移らせうとなる
ちべお前はいつぐ気も開く笑顔が業の不貼にまきる
ものと本復に成り近付べ産をもたなれ静しこ計
彼に産の異を産をもあんと孫側に寄り「お孫さん
此所のお産い為が自由にあるから宅に気ぐ十分て
宜敷 ハイサ行ても隙ぐ梁山も泉あも紙ひ元
気に出来て来ないに お産も経ひが行幸に栄さんせ
清潔く全快して義さんと私と二人で話方へ行く視
たへおぐるまはへ 私い何様も夫が出来まひうと
男ひ ヨヤ何様で云出産ます 元「アウ左様
ありさーしこ又義さんい金屋へお主の様に

まり〳〵私い東都へ帰つて住年と言まいぐらふと
夫ら苦労でござり生ます　ろ「イエナアニ手紙をもらへばこも
お紫ド生成ましたナ　万一左様ありまし〳〵さんべアノ　お前
さんと義さんを私の方へお連ヤて出も他のお世話ふ
ろうなひ　様ふのさー　まれいな　私とお豊と二人で手伝すれへ
栄さんも来助さんもかしーん　助力呉まれ　ぐらふろうお見
さんを楽よ　義ろれ　まれョ　ろ〳〵　手紙をもらへ　気ふあらけ
でござー一日も早く　今夜もろて　家ぐ　藻ぐの　婦美川ぐの〳〵
ろ「て古覚　成ョ　ろ〳〵　吾妻ろうい　祇園の　妓女と　ゆうの
方ガ宜　おざる　まさう　子へ　イエ　左様でもありまひョ
私ろう　其様ふ　ハ　義さんガ　要〳〵　知りて　ちなの　名で
おざるまひへ。　義さん　義〳〵　エ　祇園の　女と　ひ方の　女ろへ
丈い　伊方とも　言れ　ふひの　ろ「ヤ　何故エ　義　十二月
吾妻　婦女の　清羅と　ふ風も　紙ガ　来ぬ　の温　泉で　楽
和　ふる　女も　紙の　ア　是〳〵　手中で　何地ガ　ふひろ　左様
作て　古覚　成ます　義〳〵　ハテ　ひゞう〳〵　ふるを　言の

西国へ行でら両方が経のサ　ヲヤ〳〵お茶さんい
実がありませんそへ京都へ鎌倉へ行て
義〳〵そまどうても両方へ物を勞りの所へ行
て行方が解らぬ悪ひもの言ひへナ　ろ〳〵行教ぐ
ご生産まして　義〳〵エそれどうても京都へ居れい鎌倉
のゞ悪しくてるうぞ鎌倉へまゝ居れば又京都のゞ
るうういゝゞ行ひのサ　義〳〵ヲヤ京都のとゝ行所の
女帝元でおざるまして　ろ〳〵久ゝのとゝ行所の行

捿でございまそへ　義〳〵ナニサ　女帝ホハうしゆ今度かげさ
ま変いるいヨ　義〳〵ヲヤそまどでいろ〳〵行所の猫ひでございまして
ろ〳〵順女元久　義〳〵ナアニ順女も猫も大猫ひざいて子
義〳〵アレサ　そまどぐいはまりませんハ子今も居しの
のゞ主とお言ひ成ちやアありませんろ　義〳〵エヽリ
実家のゝるいあさノウろ〳〵アレサ　お茶さんの
お言ひ成ゆうゞ家りませんハ子　義〳〵ナゼそろら
るいざらう　京都ホ居まべお縁とのゝ祇園るのゞ

恋しくりくるうぢ山地へ泊まいか長とりへ泊
原のゞ暮いしくゝて美ゆたろう居る指ざろう乳
りゝざとゝのサ　えろ〳〵ヨヤく手振る乳味ゆ紙ゆ受せ
成とゝやませんヨ指ろうしのねへ　巻〳〵十二サ　女ゞ
可愛ゝらしのとらへるヨ

處女七種四編上之巻

處女七種四編中之巻

秋色艶葉

江戸　爲永春水編次

第廿一章

アノ子お花さん女程美をりゝむ男ハ世の中よゞ多るませんよへ
巻　まゝ指りゝア女ハろうると男のゝ心ゞ最嬉ふ乳
易ゝ　ものへ多ゝのサ　女のゝ心とそ中ゞ多ゝろ多ゝハナ
巻　ヨヤく　さ移ゆアア身の傷多紙ゆ言ゝ成ヨ
巻　丈ゞろうも　興ヤ　浮世の　文白　まゝ　先古ふ

ちゃく人まるてるも多ハナ　ろくアレサ左様お糸さん
ゲ美ろ様ニ来ようて実ガ多ひろくお花さんも様
気ガ混乱のでおざるまるへ子。子ヨお花さん　義ワサア
仕事ろ多ハ論ガ出来さ様ろべ　仕事モ一ウ
房を開ケて皆様　お糸さんでも逢
吳る　義ワ仏様ト私ろハ糸倶でるろうてハ逢ませんヨ
義ワそれぢやア　お糸さん逢て吳る　ろワ勇みあと
お糸さんの恍惚を義てハ逢ぢ様ものう　義ワフン

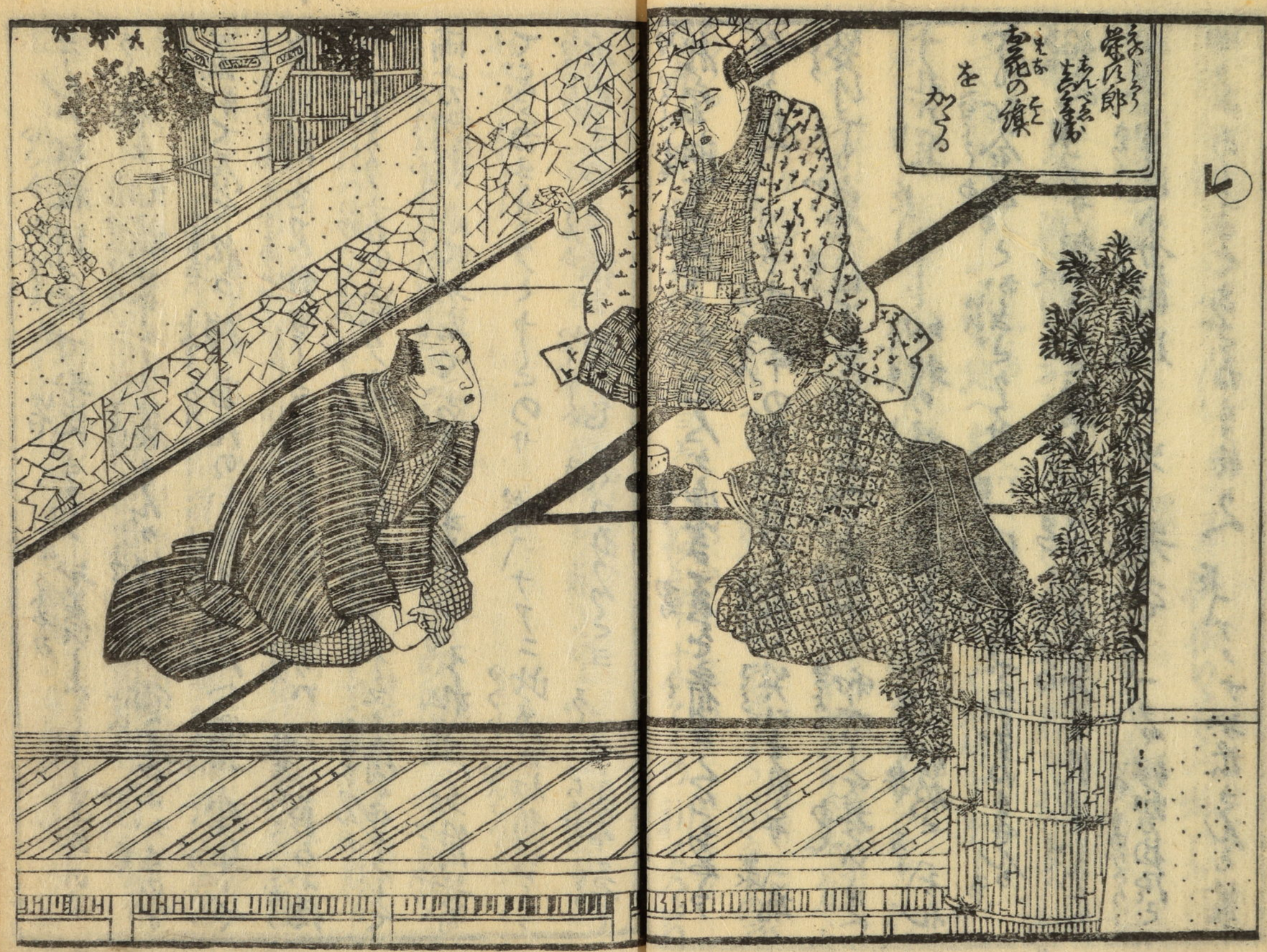
接量ゐ其方達の方ガ手様実ガるひのざるものう丈
故仕事ろ難堪ハナ　ヨ本ハ　難堪ろ彼の女
中と腐通を成のろハ　義ワナニ手様ゐ逢義をする
ものう仏でも仕事ガ出生てろ故来精人とろ
お糸とのようろ外ろハ　ろワエイ　義ワお花さんハ糸
都で仕事ガ一人で居る中ハ義ワ恐ふごとおりて
物て吳ろのざろうモやア別のろ事所でハ
二女の外ろハ差ろも見様ろハ　ろワイエ吳ふなろべ

幾人も奉公ヨ吉源の義さんでも毎度四義で
ありますせうへお義さんさんどん其方の吉〻ろ氏に
初て出産成そなるものでも産まれ子エ　義「アハ〻〻
イヤ吉れへ奉ぐ物紹介の者ごといつて高級の人の
義ふんとこるを知る度が多ひいナ　〻「アレサ義さ〻人左
程でござるまいが言通りの高級ふ出産の中
あるこのふ遠ひるらふと思ひまして花「イ出産保
さんのお言の通り祇園の枝女さんまも随分高級

脳ざのぶりまして　それい産助が　委細初めて居ます
ろ来月お関歳ヨ　ろ〻出産歳まし　私が推量の通
で出産ますせう　義〻さ〻言程なるんおーもあひ
産と丈いお義さんが往かげんふ調子を合せるのご高級ふ
居と所節より大きふお義さんと人ふが悪〻あるとそれい
仮ば言〻お嫁とお豊女ら入ろう立ろう種〻悪智
計を加ものごろう豊産ふ成て仮あれのサ　〻「ヨヤ〻〻義
豊そふな仮付私がお義さんを悪ひるを教まして　サア

丈夫成仕まつり　　死ヲヤ　何程のことよ　私いお暇
さんに要ひるを教へられさ覚へべきぞゐませんよ　個
お茶さんの浮薄をお好なのを　お茶の所に居ると節うち知
りて居りまして　八ち処へ参りて又妻〳〵お笑やまうさ
ヲホ〳〵〳〵　義イヤ何ホしても二女でまた私ホいぢうちやう　弱
ひセ弱ホ　何程ウ　弱ウ　そわざ　義と
のふものも正直ホ　ものが教度もあるうち　ものさ
重中ホ要ひ　義ハ　ヨノウ　何年　ホ年の初義ハ

私宝船を買てナガ二人ガ楽ま義を着ゐ　ちやう
ゐうれ　ヲヤ来年のゐさのふと　義　蒲ガ笑ひまた　義　蒲ガ
義ハ　ても鬼ガ泣てもうまいれ　何でも　和合して　拵ば　さ
ナれが宜　義ハ　ホ〳〵　幼稚の拵でぎゐまた子　義　何拵ば　義　それ
でも私金拵ばとあざうナ　義　筒井筒でぎゐまたん
何ガ　義ハ　アナ　お茶さんと義さんのゐ　義ハ　ヨト
お茶ハ　遠ホ分解　疑ガ少し　考へ　ヲヤ　伊勢物語さ
ホうホ　ゐるゐ　ちざゐ　またう　義ハ　アノナ　お茶さんと義


をかくる

さんい初雅別深でおそどろう　おそろしふとヤまたのサ
ろくてイエ　初雅節ろう　義さんが経史の教ろ吉ふかたのさ
義知て居て私ろ　浮留理のお師匠さんへ通へ途中で
毎日顔を見合まさけれども手間分へ　義へ西ろ帰
だとだろう言て通り物金さのサ　義へイエ手間節ろうて
両方ろ恍惚てお左でおざるませう　それざろう角丹菊
でござるませうとヤとのサ　義へナアニ此角い初雅節ろう
近頃までを振て　姐色気ハるろうとヨ
ろくてイエ　手年ろ

他女を送ゆせるのろ好みお成ろ新とのろへ　義へ恍ろうて
ねへろホホホ
逢見ての後の心ふ忘れバ昔ろまの成思ざろけて
知て　お花ハ日ホまして保養の楽しみ気晴しに水ろ
流切の形帯く訴ろ　某の利目ろ自然功を立ろる
時月今日ろ全快して風呂ろ入髪を結さ新金の
関を好ろ　お縁ろ芝園彼化粧ろの花橋を白くまり
込せろ　夕暮を浴化粧ふよそおひろその美しさん

月みも花るも弱て寝るものもあきわどの墨色丹て
さすがに京都の出産と言ども初れさる自然の人
形珠ホとう八け風俗を脱よりまの御深ら母減宅初
京より下りる第の姿ホ百結の美人とあると四海辺
も麗くだりの潤色ホ京人思ひ着慣物ゝ放知と
高くお前の頭をあがめて手ホ持ものをさ人誘しを居る
人も左　ヲヤ〳〵京人さんゞ伺ホ私を着て望
成ましへ　ろくアレサヨホ〳〵可兵人ねへマア今花さんお歩

成ます〳〵ヨアノ子お花さんゞ今生と遠所て初とる角
も不行言ホと笑羅お成ホ成ろろ竟着慣て居る
のでありますヨ　ヲヤ〳〵ヨ　ヲヤ〳〵ヨ　ヲヤ〳〵ヨ　ヲヤ〳〵ヨ
白粉の外ハお花さんの美男ざろう亜級の風ようも
高でおぎおませろゞ逆も生涯の聘暮みのへ論方ゞ
見ます生せんハ子夫を手振ホ お覚さと和ろ〳〵ろて汚ま
せんヨ伺振気を揺ても お縁さんホ相対まれあろ「アン」
マア 減ケホ覚ろろも出来ませんヨ直ホ私のるを言

成ろう　義へイヤ　まさに　何方が何程も中されませぬ　古い
夫婦ぐ。両のまに　抱と　接の　泳ぎサ　嗚呼　義　若旦那　何と
ぬ　姫月日の下に　お手れ　成ろう　宮の　焼餅の　古文でござる
まに　お　猿　ぐう　賊　夫の　形　市　両女　ぐう　揃ひて　英雄
のを　何　成ろう　ふ　何が　出　若　後日と　出立　ました
夫婦　義へ　エウ〳〵　老丈　主　親の　此方と　仕　して　ぬ　居る
るも　ひせ　まさう　左様　捨て　男　でる　ひな　義へイ
ぬれ　大　に　蒲団　中　ま　ま　ま　平　市　兎　成　ぬ

危　義　旦那　も　味噌　お　上　成ろう　周り　牛　子　イヤ
茶　噌　い　今　夜　は　汁　せ　ま　ら　て　上　稲　と　ん　じ　て
味　噌　を　揚　ま　け　て　重　ま　ま　。　ア　ハ　ハ　ト　揚　子　の　方　へ　ま　り
中　義へ　ハ　ハ　ア　何　を　ま　う　面　白　い　男　ぐ　ヨ　ノ　ウ　義　イ　エ　モ　ノ　何
ん　抱　ま　お　お　孫　さ　ん　の　ま　を　義　で　も　賞　て　居　ま　ま　ぐ　ら　の　義　さ　ん
の　稲　ま　義　男　は　赤　初　も　二　人　ま　ま　人　ま　ひ　ま　ま　京　都　ま　ま　の　を
一　人　も　ま　ひ　と　常　位　左　稲　中　ま　ま　ヨ　ま　う　自　揚　を　社　成
て　も　義　さ　ん　ま　ま　ま

さん「イエ私ハ此節ハ手紙ハ好男ごともぞんじ
ませんヨ。ヲホヽヽヽ　爺「ホヽヽヽ何様でおざるまいへ私ハ
るものをおきごと養さんガ後をお立ごと仰ません八子
養へ始ろつまらるいるだろう言て居るモイヤトキニ
夫い紙ガお嫁さんハ是非とも明日宅へ行のう
ろへハイ又出直して参ることもアア一旦帰りませうヨ爺
あのと出女ガ留主居ごろう栄さんも気を配て居ませ栄さまも
せんけれども久しくお客様へも出ませんろう何様

居ましたろう爺て参りませうヨ爺へ分務多ゆるを
中稼ごろう家出遍留てお主成ハ今ませ私ガ毎日
で迷苦労だろうクけまして全代アハ私ガ毎日
御てお嫁さんハ楽をさせましたヨ。何様ぞ左振して
ませ　ろ「ナニ又来ハ参りましたヨト又養さん
方へ向て　ろ「アノウ爺ぞ見ぞやアア子お嫁さんのお元気上
のお役ハ早くしてお上成ヨ　爺「ヲヤ婆ハ爺ハ
家ハ　爺「ヨマア何もかも捨て置て

お孫さんを外一ぱい抱き締めてけれべ涙ぐみ
とやて居りまして義一ナニその後義へ桐川の連中
でも喝采して十分張り切りまして お豊女も嬉さんも
不残抱き合ひ泣きに泣けれべ嬉しくそれい見兄ぶ
僧侶のサトさんも嬉しく難渋ぶ仏様〳〵手合
元気お孫へ翌日家へ帰りね
時代変化してたれ 春笑

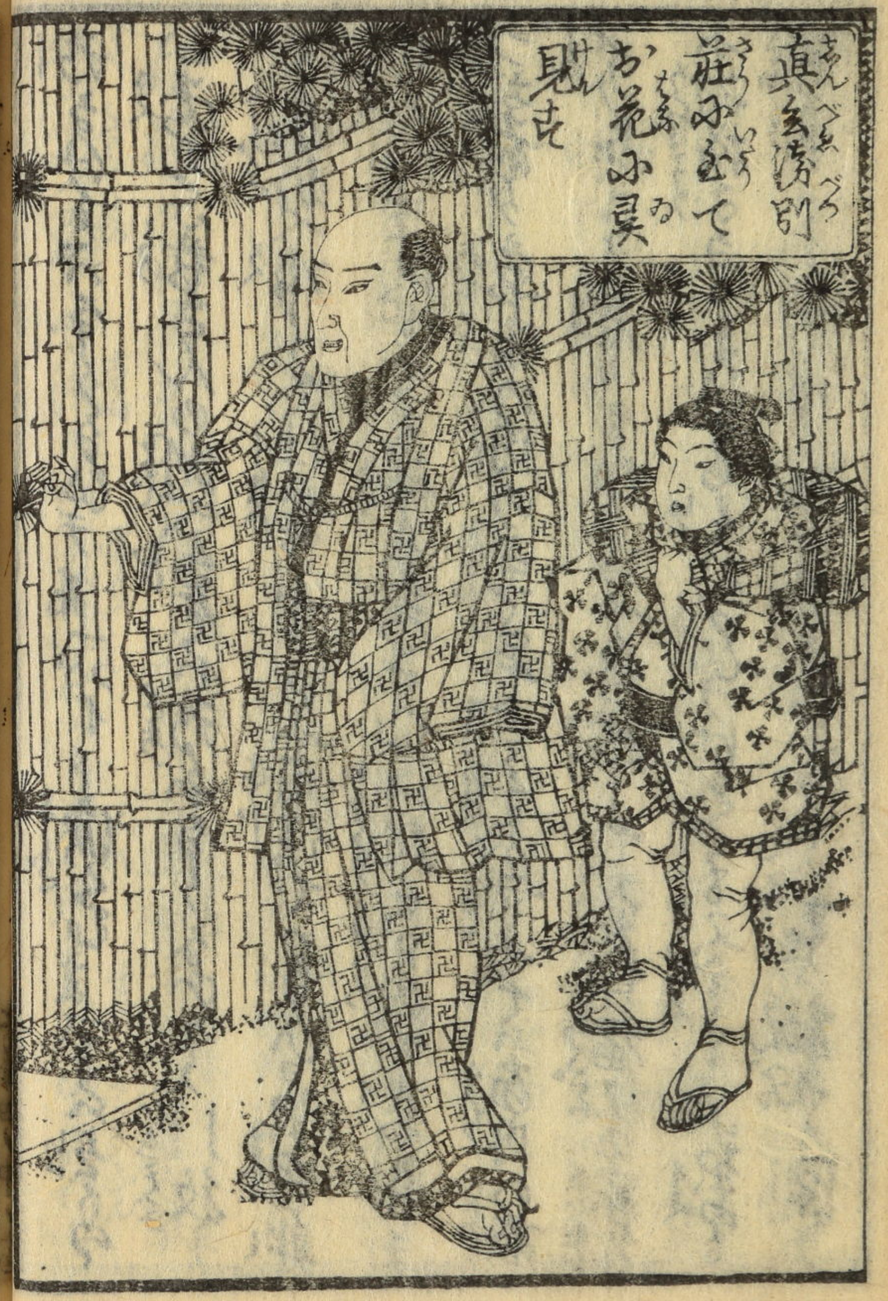
第廿二章

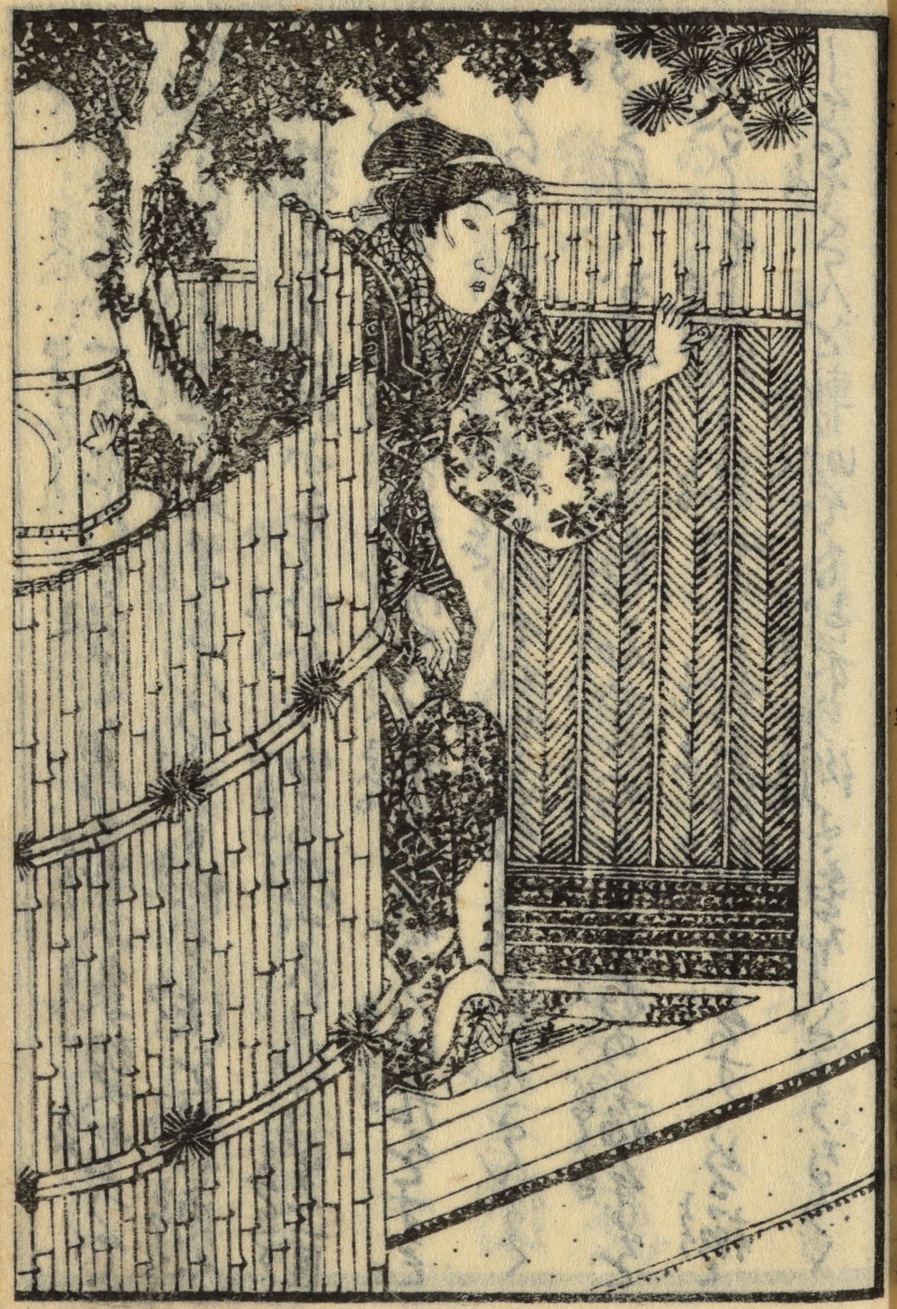
再従兄弟の別荘にて蘇生さる お義の
身のうえを親戚達と相談し 別荘へ引取り お義ぶ
財産〳〵財産の横取も無て浅草へトキニ先年ていぶ
大変ありて 大でも命みな
なくして お月さま友の中 お孫ぶ
居る所で上方から 死体ぶ
葬ぐ中で 死去て お仕舞の沙汰を義ちつく 対い途方

不美を振り出さんとお達者不お振出来て一同が安心と
話まること花八イ みぐるふまるまるまる

紙ふぐ赤おーい赤のるやや先組のゆをもひもひ出して
身をたるゆふ紙るひと行ませんぜ花ハイみろこもは
の中伝やら答ヨトふをを紙手乗こうけ花ハイヤをを
で先前紙義さんを私の方へ嘘で嘘をーこぐまこ大こと
ゆこを人へ海るまひる花へハイまでぐるまこへ結ごらふ移ぐ
ゆこを人まるのを知って指ろこ更板でこやく海このひのぐ。義海
伝板ーここ花ハイ見ろ花家人出て指りまこトこつこ言て
柳側へ出知ころふ海者をこ付て義助を使ゆ学るこの
時言葉海へ次のろ人ろ出小信ふ村せ来りー菓子の折
信と言ふ社人義人言葉をこーうこ人へ言ろ人浦嬢を御て
嘘るひ採りて網へこうを持出ハイヤ私へ出ーふぐこり
言ろこうこて出土産を言ろ花居こサアゆくぐこでマア
限伝でもおこ紙伝ふート蔚海の言葉をこー出せべ言
の毒をふまも花へ押頂き花へまこふモウ採こと言ぐこ
ふ毒ーこ言「オエお礼を言ろ板るものでこるひぐ子紙
伝んでた答のを焼て世こて来ころ他所の種と違こて

随分浮世絵師の名物ばかり出せり「ナヤ蔵で
おさめ置すう浮世絵師の名人尽くしの家の種々京
でも評判をいとまなくト蝶々そのよ礼を述べ菓の黄
花をこしらへる支度をしるべく接待をする
主人をまつ間しばらく待て呉れと川千で酒で出えた茶も手軽な
麻生もおのく出て呉れ然れの時近き時代に出せり
居合せたる客人又私どもの方へ来て客やてのの京
都の客人斗り激しく激しく雲雀おあと宜敷接待
乃ちまけきべるうるひテ花〈バイト渡ぐむ〉とと云ふ
お義と義さんの例へ金ぐの乃ふるうるひうう〉敬一
て京都へ帰りて仕舞ふとらふ肉体でいるひョやおの身
のとへとうと女でも徳右衛門さんが孔雀を放て来おとびま
づお義の事居の間の主ぐそもうとうてい面内の最
メりをする着ぐるひくいうの鶴やて来れが福沢の家
小柄なるまひうもまれるひテけまどもう今さうふあも
宮弟うきて作れも乃まひうもそこ言ぐ動転のぐテ


真実清則
荘ふむて
お花ふ見
見せ



山西でお前が一度死んだと思ふて来て系統人になつて
お呉れ[illegible]で注で又半さんのまゝ何とか法を解て内ん
をば離れるひ抱ふ[illegible]る故合が出来抱でいるひ子先一回
系統人になつて彼れの[illegible]と紙抱てそれ[illegible]恩居をすると
らしてたゞく此地人下でお出義さんとく
ゆるけてお呉れ[illegible]形が内で仏事の[illegible]
快合して上稼と思ふ[illegible]親戚やいろを云すくる抱
しそうさんと暫時ぞるい例よ[illegible]ぞうるく

両個の中を引さゆて[illegible]
らざるませんゼト
繰くしろ高[illegible]
べお義も[illegible]
く通るい出[illegible]
花へ隠くの[illegible]で[illegible]
喜助が飛へ[illegible]者も[illegible]助と二人[illegible]
墨のとりやり[illegible]

お、死に臨む角物様なる紙くずの物品に能筆なる
理借の為入ど来たの人の思ひくもらら神しき此身の
上又一つのお孫が伝切者人て来れい笑古が
るうたづめて病中も親婦婦ふまこうるんの
実形まて彦の目も離ずふ看病を最まるやはて
器一上ふも倦ず肥えまで懸くらけ一さん根為来
於で時せ一張金を貸の達入とうて知れる
るるうう仏烈を磨く吉妻の死所ぐるる人情い

男ありの春の抜くと悟る身懸婦の命るるく世話
て長る実情ふ仙てい否ともけ身のと笑ふ
を伝様しそも思ひ切わ行ぐるるぬ行ぐを行の因果が
しそる思ひ情らも別きと人ふ来れ物多か
仏来身るるも相のるるいぐるる乗ず変の
伝死ぐぐぐ今い思ぐ変節い祈ぐ一倍で
仏率死ぬずふ笑さんは垂支りのをとを変ぐろ
殺るき夜迷ひ一の仏様して別きて古々の教へる

くゆるを様子とかいへ左衣義理とある字をと考て
い行様〳〵なる艶移べるるの御ぶらく思まつり
ゝる通れ不清潔と奇異なる御ぶ
あ仙さを孝養食の人まるも安法さを交この永の
上それぞと知えてもし拍子未練が残る上るも
切て暫時高麗場の高麗人先一思ふ
可哀と仙の為お覚悟して去ても自然と死ぬ程
まで不男ひのんぐる男のゆ嘉慕の念ふ心されて

遠ひよろ〳〵む女の情婦人うれてや薄幸恋れ
ワるゝとたろう法体て去ゞ〳〵へ
ふ体あろける

秋色艶葉　虞女七種四編中之巻了

秋色艶羅 處女七種 四編下之巻

江戸 爲永春水編次

第廿三章

お孝は涙を拭ひ、真実満さんエモウ要さんが
獲物をお叱り多成て私が不行届ばかりの事も云
解のあるのでありますものゆへ要さんが
まつよふ清ちゃの美貌推察て丘仙まつたのの私
おて孝と義と申せう者度糸新人殿ものもヨ者し

形ヤスとお頼ふあまくて我慢を云ばでどさへまをそう
何卒お茶のたうひで出度の義さんれまへ逢せヤまは
くおあさんが出ふ私の頼を用ひてお呉成めと行
たて歌うを私ヲ変ら出来るめつ子だと人他を淫が何と
言へども是非あくいお茶の代の安堵極めて上るうう
かるうを出ふ苦労ふるるのを機嫌ようく来ず人
戻ッてお呉成ョヤく為さい強を私の頼と笑ふ
てお呉みまつさ変でこを私の頼も為ろう大分と嬉ひヨ。

ナア美男 ヒとしヤア 私ヲ貴を わと面変ヲあるうと言ものさ
マア〳〵何ふしろ冥のと結さんしてお呉あるさとば 代上八
私がまと何私ふも世話をいて まへ 実ふサ濃ヲ
本気で京へ戻ア成て行 行程にう
嬉しい変てこぶるまへ 無主洋 市度ヲ極ッて人
ちとば 当地 を立て京都のおちひの
者を食で 変さう まづ 彼地へ 戻り江おれ 徳会
中級 十分 見おを 上で 寛ふ 成ヲ

冠示唆致へお登りの上ども万一此地の便を待
て私ゞ偽をいつさ形よ思ひ遠ひまんぞを成て
一途のおもひ迫りさ祈ろでもしてお云ひ出ちゃ
るハのハョうるハば私ゞ種ほよちゝんを成こ此の
中幸防をしてお待成ゝ
ト大変をさろうて後ゝまでを遠ざていよもちの
お花ハ京藤倉の無本家福沢一流の血縁
ぞちゝ分一家の移ふまんべき人ろとゞ女ゞとも森

世話をさろうとおゝ
再説真藤ハお花を種ゝみ異見して帰ゆきゝゞ
此節義方ハ兼てその内法を聞ゝ力及真藤ゞ於
花ホ対侯さろうを拒さろつて祈ろと別所ゝゝ
帰ゝゝお縁の方へ参寄久ゝゝ程ゞ真藤ゞ外親
顔中の内侯ホてお花を宗ゝへ帰ゝ寄ろものみ聞を
さろのゝけゞゞ縁ハを聞ろも申さ言ん方も

器ホ多ゝゝゝを已ゆろ別家の老人達も如ゝ

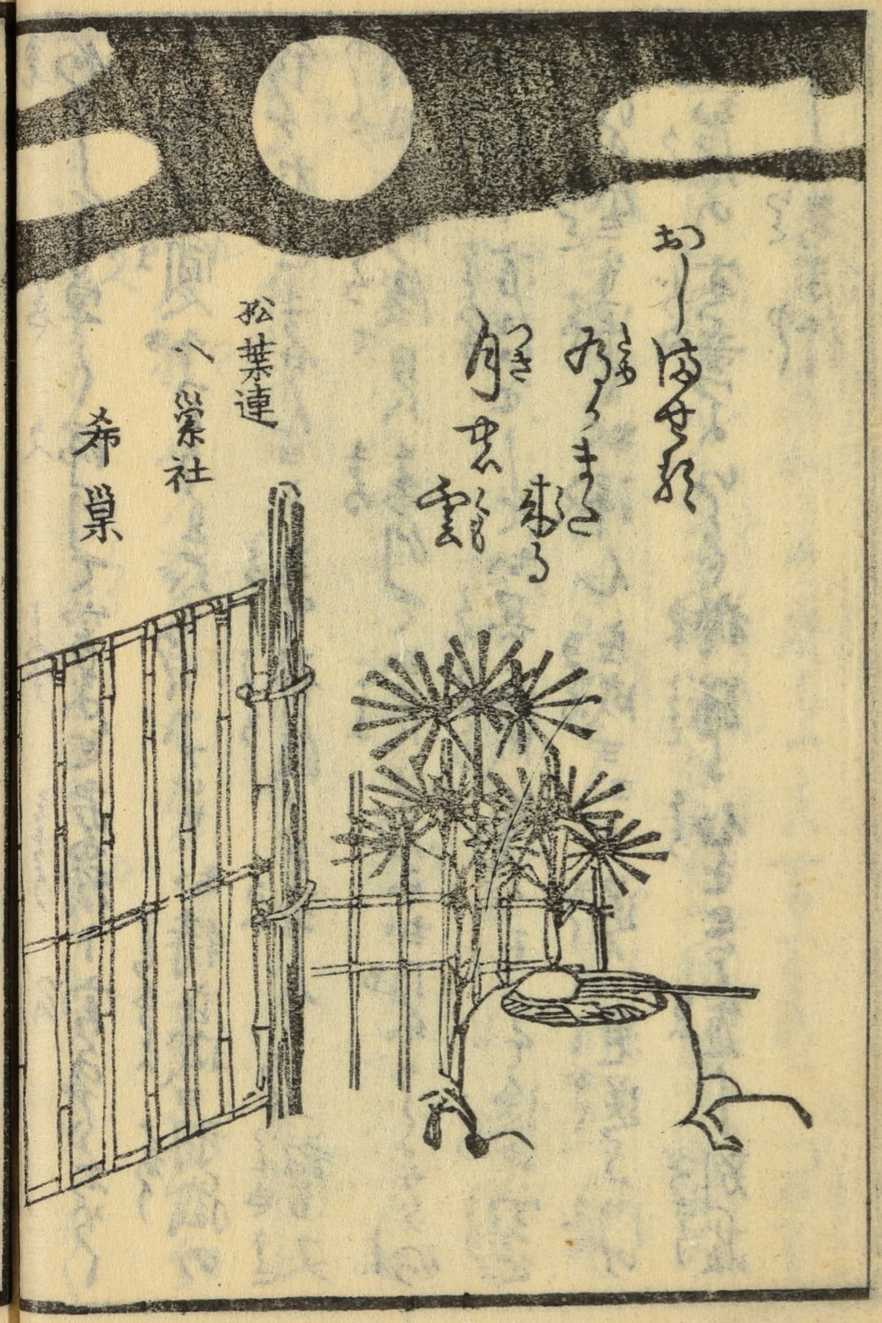
なく今更実の情愛より深くおもひて別れをしたしむ
ことは涙ぐむとなさびるる我方や行末を思ひ合へる
滅と寔に哀しとなく他なりはして男のあるうおれの乃
手身の仇なるを知へ相よ思ひ迫りて絶き伏くるくし
なる悲傷ハ筆に尽せぬるぞうーさて猶何なる涙を
ながしひ　くくサア義さんさぞおれさんが待ておまをらふ
うう　さやく帰りてお上成ヨ然しても寔うおれさんと
同所ハお左成のもゆーのるの相ぐらう仇所へ

ぬぎまふ　お宅ハ居てお上成ヨ。アヽ　ホ以来の相よ丸を捨で
お頼ひでるけるとバ結ぶ上　私ハそを身ぶ常ぐらをそ方うく
せんト涙を新ぬて　神様ハ信実見へくを義を義者
る眼をうるまて偏身を吐ぐら　義ヽ　ヽーー　真ヽ虚
さんの言のを同ぶけて京都へ帰るを乃ホうて呼れバ
宜ぶ行ぶも　ぶくるまひと言ハ此方の自分ぶ今ハ
此身ようう　ぶ来のをを信身の姉妹の相よ思うて居ヽ
ぶ一京ぶの元人ホ顔を見ふるのぶ恥うーひと言て

八瑞松之蓮
希巣

居るゝゝ直ホ業ホして度らゝゝ言ふまんョ「万一
然ならバお爺さんゝ変ゝて了ふゝを有て内親おや諸方の
手紙敬まるゝホるゝてお花さんと一緒ホ此宅へ来て
お仕事丈成まーナ私とお豊ゞ精を出して家業を
身ホ入てすれバ何程ホ私やらお家さんとお花さんを
養ふとやてハ不足ざけれども出ホ自由を幸防して
お左成バ稼じやアありませんゝ義ゝまとゞゝて生
活するホおやよだゝ苦労をさせて居らゝまるゝめゝナ考ゝ

何ホしても早く帰りて宮ホを書ホ行ト言ふのだゝ赤ゝ
とゝゝて内へ帰ゝるゝ「アレサ お待遠成ョ羽織の
紐ゞ形ホまゝんョトゝて貸後ゝ来ゝ「お待ゝ又
明日ゝ明後日ハ糸ゝてお花さんホお見ホゝるゝ何
卒様ゝ言ふをしてお呉遠成ゝゝョそゝて途中雪を
せゞるホ出ホ早くお帰ん遠成ョトゝ送ゝ見送ゝ門の
内ホ家の宴音ゝいゝゞ猫猫ゝ知を見ゝ直ー別荘
きゝて急ぎ行



亦言養者八路をいそぎ別屋へ立帰りまゐらせ花八それを
着るようも多処側へ入れ寄りて　お茶さんも宮て
でーやうらも乗れてお帰り義成まらふぐま私八寝甲あ茶
さんの見非お別を中まをん　けまゐるりませんョうく
マア又お見ふ　うくまゐそ一旦八お側をたるれるひけまゐ
流るひ桜ようまくまくョト言も終らゐ　あやくりあけ
倒と使てを注入ける
菓てお花八真まを傷ふ言葉されてあるふ多工ふ

ひしと居れども亦逢ふるの日数さへ分る月と
空る日もあるに隔て逢度一会で下ろう時の
道中も長き旅路の憂を思ひ今ハ別とて登れ
路の手前當ハ屋ゝ〳〵も淺き縁うゝとのうねべき
雲井の空の眼やしゝ名殘おどろの東の風も
大和のとゝもるき砂の底枠量さへいづらゝけと
形有しゝ義者ハ孝助と二人ゆて花を種ゝと爲て
言ゝらゝ酒者ゝを挑へゝ〳〵ゝ寄せ乳を嚙ゝせんと

酒盛の正さの人〳〵サアかゝれさん世一酒でも飲て乳を嚙
もぶ殺ドヤアゝひゝノウ孝助矣仇もこれぎう逢れるひ
と言ゝドヤア今〳〵手程ホ人ゝと思ひて八身の毒ざ
アヨサア一盃呑ゝ成ナ　ゝ〳〵左程でぶさわ手ハ真ゝ酒
さゝも如何堅く辞をうゝ〳〵て御生成んぶゝうん
でも堅の中辛抱して時ハ第を御待ゝさわまゝ〳〵そして
ひ身ぶゝも親類ぶ和と言ゝとゝナニ此程別とてそと
限ゝして主ゝの一旦真ゝ酒さんの顔を見れバ主後ハ

何でもお花さんと同居ホムらを拾ひ上げまで養
知れるひて了るどあり〳〵考へ丈ハ京都へ出京ごろ出地
ホ殘まぐ紙とい〻相撲ごろう変屋もるひぐ紙〳〵てあるく
お花さんのまて正貴尾ホるひて上の座へ帰らきるひと
いろそハ何のるひハ君を他でらくさまろ拾ようりんぐけと
ぐもその代ままホ仕方も真を濱さんも拾後その親様へ
ろろ乞ごろうるハば悪しく男ハるひぐ紙せ「イエモウ
私の親様も何も不立と宜しふごるまれ何でも四新造

拾の御願ひぐ仕つて四製品でおを立きれハ私ハ外ホ帰ハ
ぐろうませね〳〵〳〵そまぞハ仕度私ぐ京都へ登る
ホ彼地の近ひの着ぐろうせ連て初のるねへ何ごろ何ハ
拾ぐヨト又さるぐと法見情その幻根をおの〳〵ハ歌る
逆行と義右もるぐさるれて居ろうける
斬て名殘のさて〳〵るく〳〵その恋歌のおりひまハ
等ぐるるのろ〳〵あるし雅〳〵那て是非の〳〵義理
浩ゆて お花ハ都へ旅立けと

第廿四章

苦も楽も見いる軒端の家業八菓屋旅宿のるすに
ちゝ母の機嫌のよろしく手つゝ艶の深ぐ乳持
出る身入れ松せ八しるき返るもさえて聽八しけ是三階
ゆて瓦浮の塔ゑ

亭抱きるきハうねさえるぐねのうるきハ
るふぐるる

つゝしのうるきハ方ぐきるのるれで金さえ

実不ゑぐね
るゝ引ゑる端唄ぐ素人とふものハ戸の敗竟藤
ゑ文句浪曲ぐて唄ハぐ人ノウ。ライくち冬ヤ此
火沖へ業潜の湯をうけて紫ヨそて今本屋の持
て来と人情本を此所へ置る〳〵ハイトいひるぐら
板行と写本の中本を二組四組持来ウ〳〵ノウ
貸本屋さんが然ヤまう〳〵さモウ〳〵どんな〳〵邪ヵ〳〵吾る
言葉ぐノウ〳〵多ホし〳〵分数不矣ぐる まるエ〳〵それ

ぞうてもの本屋さんがもうくどふもとハ何のるさナ「イエサ
もうくどふも此家の四角義さんや　おまさんの山尾ひひ
本ハどざるのませんこと　新板の出るのを待兼て賀切を
四度ひきるシ　古板のをハ三四度づゝ繰返して山尾歳
ちうちうにふまに合ハ入まいのうのひとやまりこと只その
中でまこと四度ひ成るひのハ写本でまだ板行ハなりま
せん　種本とうぐこざるまハ狂訓亭の才子の
中で一番ひ初うう作者の校合をして居る山谷屋の

若竹のお祝賀ともうしハ女の著作さ人情本ごとヤ
まこと　ろくまく　繁人ドレく　お見世久しい時の延津賀
さんの作ばさで面白うらハト本を手ハ　表紙を
開く時ハ二階あて　奥女の声　ヤれさん　お孫様く
ハ　まこと　ヨ　来さんが　四ツ　ひとりけて
ませんヨト　階子の段ひ　頼を出して　お孫の方をれバ
お孫ハ完ハ　爪ひとあく　そ　真似をし　居ごろ
居で　ひとりこと　思入をする　二階ハ　行ってけもく

役者の声き明屋敷　騒ハしくもまた強くしく
思案ぶり　分て見ぬ覚えいと言葉くしき風情にて
他見もいつれ和尚人動くびや　お保ハ母の客今京ふ
かすかすかとど　約束けど　今見ハ常く　乳ふ合ね　与漆
志のお客ゆ　拍子　産業　立づしと　まりの　養の　奥の
方へ　隠まる　格ふ　ありて　体　良心　まこと　好なる　中本　役
関き　くべドレく　戸　急迫　チョイと　見　宿や　ヲヤ　森之　廓
改名　寄永　博賀　女作。　文で　紙　本ぶ　芸他ノウト　一寸

くう　懐かる　そのの　文句
「思ふる　死入　通　伸の　教の　格　言　和　ねべ　愛ふ　地獄の
伸　相　看て　見　べいよく　速　仏　かさ　仏　世の　要用
をあるそろ　ふて　後生の　書　を　的ふ　和　沿　再度　格　歩の
伸　と　見て　涙　を　流　悦ぶ　感　格　ふ　人へ　傍　り　も　ま　ど
第ふ　速べ　涙　ふく　寝　入　眠　ら　ぶ　愛　感　見　く　楽　し　感
あて　時　あ　べ　苦　く　ま　る　世の　人　情　愛の　世　愛ふ　面　白
愛の　風　情　や　若　格の　格　ふ　ら　の　廓の　廓　舟　川　楽　き　二　階

の駿ひ。いさら金盛の司「コレサ 兼助殿を名殿坂までも
ちかんつさ おかんつさ
長ナヨウ 新ぞう 殿「ア 今然言まきしょ はしまさんも新板
今の新板物成きしつるく 四つ半ライをとく出て金匙
日長町「モレエイ ごまさんも新板言物をさーッとへコレサ
ごまさん早く兼助殿を呼で来るョウ つきへたく居
所の老女さんの不乗中拾ってきしつるのじゃ 為ひョ殿へ
おかんェの老女さんざ殿きへ 内の老女さんとのつく只一人
ざ子 長町 支でも波殿ゆい老婦さんが二人きまんのョ

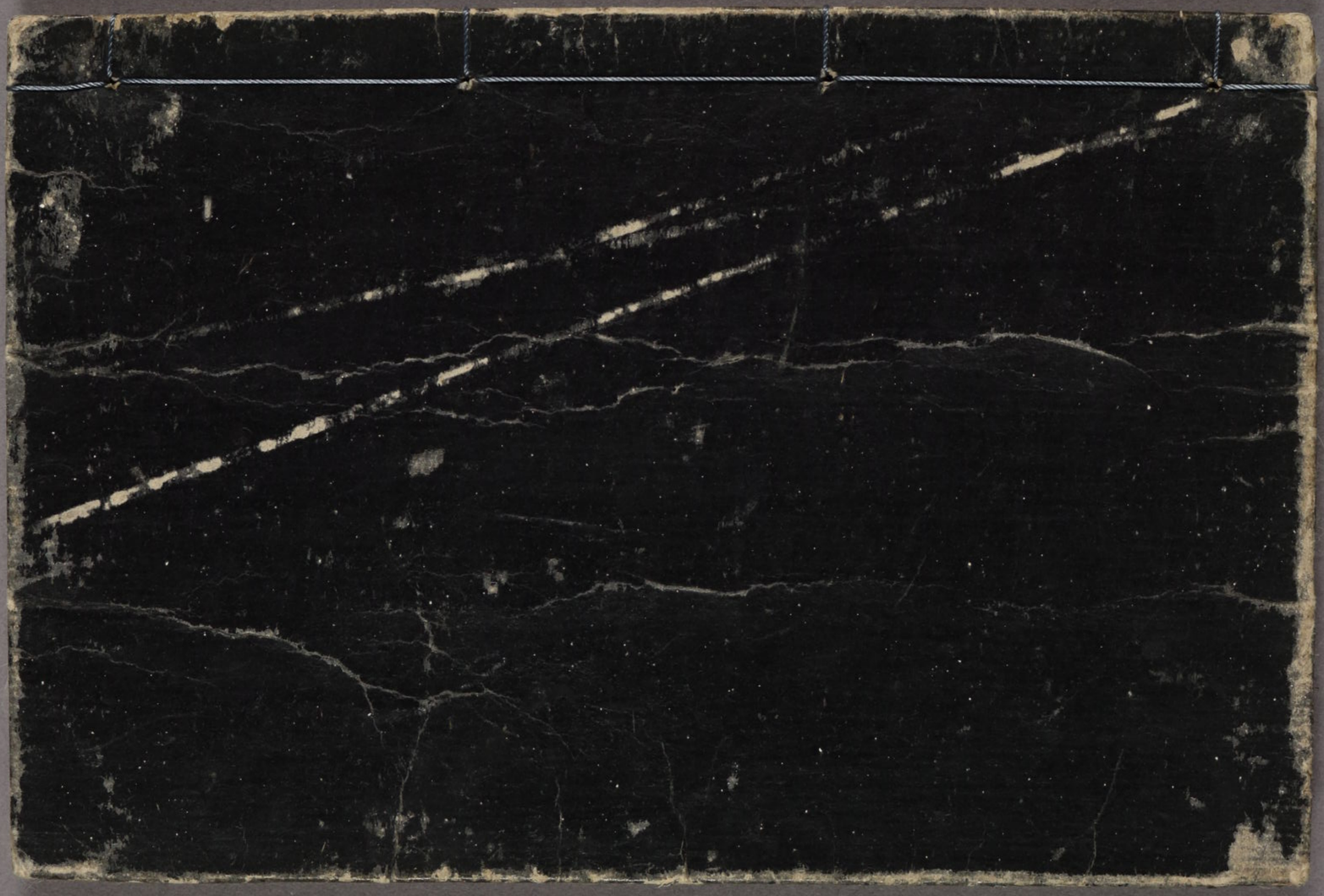
「ナニ一人ハ母ひざョ つまハソレ ちゃうるうさんまー 拝ひも老婦
さんでござるまきまナ つきへアナ 頻類早きへひ身の言のく
母ひでるひ方の老婦さんざョ そっつへヨく老婦さんざふけ
で可殿子 例時茶ると悪ほどう言ふひ子も頂ぶ
老婦ャといつと老年でも云者を老女と言ョ美女ものく
行歳ふるひもも年ハよるひるんぞといつく酒落て居ま
きハ つやへそして元女のうを稚くの戯名をつけてみを
よろーまんョト こんひるうきうを思ハ同様ハ言て居る

帆の見ゆる
遠八隈更
今日の月
ヨコヤマ
光賀

若者栄助来る　栄ハイ堀へ行てまいらいませう　アイ行て
来て居るのあーそして昨夜ハ清香楊をあうがうある
らんでよろしくくらいのごョ丈らこまハちばかりさんの好み
物ざうう上まいるといって居るのそまとろう宮常さんの天下ものさ
さくるりつぞ　ハイ孫成ろ同て居る助茨来さうーやる
お客のとろり
たろうさうショトひろのてさづまるとき　つやまへモノへお栄さんへぬーの
客流みをしーるんせんろ　よれアイあるらんの頼くヤー
まーしょ栄助どんあるらもいろとりって居るヨ栄ハイ

何とやまいのでおざるまいよれアノ此同の客人を
連れて来て居るのあー栄ハイくト徳兵衛方のおぢさ
をして出て行　愛の二階ハ居ぐけーして日中の世話の
座敷の狂ひ一途ふるりて読うる折しも二階の
客人ハ不残寺連陽よを下まて帰るのお孫ハ客人
本を使人さ金お客さ桟橋まで送り行　左様
ろうば此機嫌徒四ゆるとト言ひ内へ入るる支度
後ろう声をとうける者ひろう　栄お孫さんお客人ヨヤ

栄さん久ザア遠入ると連立て入る中のるめて時候
の挨拶をして御家い烟草をぎらうの烟管ふつぎて
差出し　くへ栄さん。アノお花さんハ京都の四宅へ四
着ごらん　栄　アモウ今月で十四又日ふるうち今日
ら明日宅へ差成ます　ぐらふ　ろくへ　鶴ア　私ア
お花さんで幾度悲しひ思ひとしろ　みるひョ
折角病気が快全て義さんとも信原さんぞを
成で焼しごうて仕ぐら　私も実意をつくしさ

甲斐文ごあると思りさるもるくく又義さんハ別ととて京
都くおゆの移ホおまりのぐ毛私ハ用も常くと且るひ移ホ
義さで地くらとうろさハ安程義さんホ源くおを尽て
お主のものを京都へ帰さるハ仕方ハるひあらと思うて
さて理宇宙を聴てお中ぶバ四本家の主人も同ど移る
身の上で四主のうぐらふどあり誠方ハるひけとど私ア
モウく仕方あり出しろうョ　栄　ヤモウ什身も宝ホ気の毒て
ろごうんぐお考きさんもお帰さんも分ぐの角ごのとりて

泣まんぐるる行のゆおれさんぶ残つて晴ーぐるくかるる恋の
中うう後脊の方を振返るるくく泣ぐるる別れて行く成
後脊姿を見て途中うう行方も別れる時の心もちと
りくくく